

介護福祉士養成課程学生の介護イメージ変化

吉田輝美¹⁾、ウダ ゲダラ サンダニ プラティバー
サマラシンハ²⁾

1) 新潟医療福祉大学 社会福祉学科

2) 新潟医療福祉大学 大学院医療福祉学研究科社会福祉学

専攻保健医療福祉学マネジメント分野 1年

【背景・目的】 わが国の高齢者介護人材不足は 10 年以上も前から懸案事項である。介護人材不足の一端である「介護業界のマイナスイメージ」は、2007 年頃にメディアで取上げられ「介護現場の深刻な実態」¹⁾の影響もあると言われている。介護人材不足が解消しない背景には、介護現場は 3K（くさい、きたない、きつい）や 5K（くさい、きたない、きつい+危険、金にならない）労働と言われたネガティブイメージがある。それらを払拭しようと、介護業界各種団体等においては、ポジティブキャンペーンを展開している。しかしながら、いずれの介護福祉士養成学校の学生の介護イメージは、近年でも否定的であることが言われている²⁾。

そこで本研究では、本学介護福祉コース在籍学生は、どのような介護イメージを持って入学し、そのイメージが大学での学びとともに、どのように変化していくのかを明らかにし、ポジティブイメージとなる要因について考察することを目的とする。

【方法】 調査対象者は、本学介護福祉士養成課程在籍の 1 学年 27 名、2 年生 20 名、3 学年 25 名である。調査は、無記名自記式で 2019 年 7 月に実施した。調査に関する目的等を口頭及び文書で説明し、質問紙記入後の提出をもって、調査の協力が得られたとした。調査項目は、大学入学前のイメージと入学から経過時間の基準点でのイメージを記入してもらった。分析は、入学前イメージをネガティブ（-）とポジティブ（+）、両方のイメージが記載されている（±）に分類した。その後の変化の傾向を類似する内容ごとにまとめた。

なお、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を受け（承認番号 18197-190626）、関連する利益相反はない。

【結果】 1 年生は、入学前に（-）イメージを持っていた者 13 人中 5 人（38.5%）は、入学後においても（-）イメージのままであった。入学前（+）や（±）イメージの者は、入学後もその状態であった。ただし、イメージする内容が変化し、よりポジティブなイメージとなっていた。

2 年生は、入学前に（-）イメージを持っていた者 12 人中 1 人（8.3%）は、1 年後と調査時点においても（-）イメージのままであった。入学前（+）や（±）イメージの者は、入学後もその状態で、1 年生同様によりポジティブなイメージとなっていた。

3 年生は、入学前に（-）イメージを持っていた者 15 人中 2（13.3%）人は、1 年後と 2 年後と調査時点においても（-）イメージのままであった。入学前（+）イメージの 10 人中 2 人は、1 年後に（-）へイメージが変化し、その内 1 人は 2 年後に（+）イメージに変化した。また、入学時（+）イメージであった者が、調査時点で（-）イメージとなった者は 2 人であった。

※具体的なイメージ記述は、発表当日の資料で示す。

【考察】 1 年生は入学後の学習が 3 ヶ月程度であるため、イメージが（-）から（+）へ変化していても、介護実習体験がないためか、その具体的なイメージ内容は、介護福祉士が対象とする知識学習レベルにとどまる漠然としたものである。しかし、学びによる知識の広がりによって、イメージ変化が起きていると言える。

2 年生の場合には、入学 1 年後では在宅サービスの実習を終了しており、多くが利用者の個別ケアに関する実体験を学んでいたためか、イメージ（-）からイメージ（+）へ変化した者と、入学前イメージ（+）からさらにイメージが（+）へ強められ変化した者が多く存在した。そのイメージ変化の内容についても、「アセスメント」「コミュニケーション技術」等、介護の専門性に関する視点でとらえられるようになり、知識と技術を得た中で介護イメージを語れるようになっている。

3 年生の場合、現在から過去を想起し入学 1 年後のイメージ変化内容を回答しているためか、上記 2 年生の入学 1 年後をイメージしているものと比較すると、表現する言語の選定に差異は見られるが、イメージ内容においては大きな違いはなかった。しかしながら、全介護実習終了後では、現場職員をロールモデルとして自分を比較することによって、介護福祉士としてのより専門的技術や使命感をとらえ、介護の担い手となる前提に立ち、介護イメージを語っているものと捉えられる。

介護の仕事が大変なのは当然のことと受け止め、その中で自らが何を見出すかによって、介護イメージは変化しやすくなるものと考え。「やりがい」「楽しさ」の（+）のイメージを入学前に持っている場合には、介護実習で介護現場の大変さを現実認識する中に、「やりがい」「楽しさ」の深意をみいだしている。一方、入学前に（-）のイメージを持っていた場合は、介護実習体験によって、自己が持っていたイメージは社会のイメージに影響されていることを理解したと考えられる。その結果、体験をもとに新たな介護イメージ（+）へと変化したと考えられる。

【結論】 本学科の学生の多くには、専門的な介護の学びによるイメージの経時変化が見られた。介護のポジティブ（+）イメージに変化させ、中でも大きく変化する地点は、入学 1 年後である。それらの変化の要因のひとつとして、体験学習である介護実習があげられる。この実習体験によって、介護に対するイメージが大きく変化していくのである。

【文献】 は紙面の都合上省略